The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドストエフスキー文学における罪 ： 『カラマーゾフの兄弟』を中心に
Author(s)	木寺, 律子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1739
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【12】

氏　　名	木　寺　律　子（きでら　りつこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２２３０４　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年３月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**ドストエフスキーの作品における罪の意識－『カラマーゾフの兄弟』を中心に－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　堀江　新二 （副査） 教　授　津久井定雄　　教　授　尾上新太郎　　教　授　岩間　正邦 教　授　生田美智子

論 文 内 容 の 要 旨

本研究のテーマはフョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー（1821-1881）の文学における罪の問題である。晩年の大作である『カラマーゾフの兄弟』（1879-1880）の構造分析を中心に、初期の作品にも言及する。罪の問題にはキリスト教からも精神分析からもアプローチできる。法の分野でも犯罪との関連で心理的な罪が扱われる。また、宗教社会学では精神分析にのっとって社会の構造を考察できる。罪の問題は文学において常に重要なテーマである。

『カラマーゾフの兄弟』の主要な筋書きは父親殺しである。ドミートリーは父を殺すつもりだと話し、イヴァンは半ば無意識のうちに父の死を望み、スメルジャコフが実際に父を殺害する。この連帯性の構造は精神分析の立場から先行研究があるが、フロイトの『ドストエフスキーと父親殺し』には、このことは書かれていない。

この人々の関係性と結びついている罪の構造は、小説では父殺しの事件が起こる以前にも書かれている。ゾシマ長老がキリスト教の視点から罪の連帯性について語っているのである。この小説の前半では修道院が描写され、そこで罪とは何かが考えられ、小説の後半では世俗の殺人事件が起こる。

イヴァンも人々の間の罪の連帯性について述べている。イヴァンは子供が犠牲になる社会問題を論じながら、罪の連帯性は子供を含むべきでないと語る。この理由からイヴァンは神の調和を拒絶しているが、イヴァンの考えはゾシマ長老と同様にキリスト教的な基盤に上に立っている。

スメルジャコフとイヴァンの関係は語り手によって罪のニュアンスはないままに「まるで連帯性でもあるかのよう」と描写される。その後イヴァンはスメルジャコフは父を殺害したと知り、自分は「彼と連帯なんだ」と言う。イヴァンはスメルジャコフの父殺しの罪を自分で背負おうとするが、ここにはロシアの知識人と民衆の関係が見出せる。ゾシマ長老は民衆には罪が出てきたことを語るが、この話はスメルジャコフの様子に合致する。ゾシマ長老の話はドミートリー、イヴァン、スメルジャコフの運命を予言し、小説中の出来事を理論的側面から概括している。

裁判でイヴァンは自分が父を殺害したと告白し、この状況を興味津々で眺めている傍聴人たちを罵倒する。イヴァンには、子供を除く町の人々すべてが父親殺しに対して連帯性を持っているように思えるのである。このようなイヴァンの意識は宗教的というよりは病的な罪責の心理である。

ホフラコーヴァ夫人は事件に付随して新聞雑誌に自分についてのいい加減な噂が載ることで苛立ち、その娘のリー

ザも、人々はフョードルが殺されて喜んでおり、自分も喜んでいるのだと話す。リーザも町で起こった事件をきっかけに自分自身の罪を感じ取るのである。社会で罪は、事件に興味を持つ裁判の傍聴人や雑誌の読者にも広がっていく。

ジャン・ドリュモーは「キリスト教と精神分析は同じ問題への異なるアプローチである」という考えを支持する立場からヨーロッパにおける罪の歴史を研究し、罪責意識の過剰付与を指摘している。『カラマーゾフの兄弟』にもこのような罪責意識の過剰付与があり、あたかもすべての人に罪があるかのように書かれている。

『罪と罰』も殺人の罪と法的な責任の問題を宗教と法の立場から論じる作品であり、この意味において『カラマーゾフの兄弟』と究めて近い構造を持っている。ラスコーリニコフはナポレオンのような英雄になりたいと望んでいる。英雄の像についてはヨーロッパ文化で多くの議論があり、ドストエフスキー文学にも影響している。しかしドストエフスキー文学において登場人物たちは完全に英雄になることはできず、英雄的な人物像の罪の側面が強調される。『罪と罰』ではラスコーリニコフの神への反逆が強調されているが、『カラマーゾフの兄弟』では神への反逆はイヴァンにわずかに見られるのみで、主題はすでに罪の連帯性に移行している。

罪の感覚はドストエフスキーの初期の諸作品にもすでに見られる。しかし『カラマーゾフの兄弟』において罪が宗教的な意義を持つものとしてまとめられているのに対し、初期の作品では罪の感覚は純粋に心理的なものである。ベリンスキーは『女主人』にはほとんど筋書きがないと批判したし、まさにその通りである。しかし、この中編小説の主題であるセンチメンタルな雰囲気は罪の感覚に満ちている。『ネートチカ・ネズヴァーノヴァ』ではネートチカの母への憎しみ、エレクトラ・コンプレックスが描かれている。『弱い心』では、ワーシャは親友の過剰な同情を受け入れられない自分の気持ちに罪の意識を感じている。

『死の家の記録』では自分の犯罪との関係で自分の罪をさまざまに考えている徒刑囚たちが描かれている。この作品には後に『カラマーゾフの兄弟』で描かれるドストエフスキーの司法についての考えが見られる。『作家の日記』にも裁判や陪審員制度について書かれている。

『カラマーゾフの兄弟』でイヴァンはスメルジャコフに教唆する。ここで二人の対話は新しい現実の状況を生み出す。言葉の力はキリスト教的な神のロゴスと結びつく。

『カラマーゾフの兄弟』でイヴァンは自分の教会的社会裁判についての論文の主旨を話し、ゾシマ長老たちと国家と教会について話す。この会話でイヴァンもゾシマ長老も犯罪者の刑罰だけでなく救済について考えている。小説の前半では修道院が描かれ、その中で裁判の問題が考えられる。これはイヴァンの論文の教会の概念に相当する。

イヴァンは自分の論文で教会の重要性を主張しながら、同時に神の調和を認めない。このようにしたイヴァンは自分自身を教会の共同体から疎外する。神の調和を拒絶することでイヴァンの罪の意識は高まっている。

小説の後半ではドミートリーの逮捕と裁判が描かれる。フョードル殺害事件については雑誌に書かれ、裁判には傍聴人が来る。これらはすべてロシア帝国の司法制度改革後の状況に合致し、イヴァンの論文の国家の部分に当たる。裁判で弁護士はロシアの裁判は刑罰のみでなく救済でもあることを述べるが、これは修道院での議論と同じ主旨のものである。『カラマーゾフの兄弟』では小説の前半と後半で同じ犯罪者についての議論がなされる。犯罪者の精神的救済についてのゾシマ長老の宗教的な考えは、一見、世俗の裁判で実現されたかのような形をとる。

『大審問官』の舞台はユダヤ人やイスラム教徒に対するカトリックの宗教裁判が行われている 16 世紀のセビリアである。ヨーロッパの歴史上、ユダヤ人は常にキリスト教社会で「身代わりの山羊」の役割を担わされてきた。『大審問官伝説』は当時のスペインの歴史的状況に一致している。一方で、宗務院総監ポベドノースツェフは後に彼自身が大審問官のような人物だと批判された。ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』を書いていた頃ポベドノースツェフと親しく交友し、彼に『カラマーゾフの兄弟』について説明している。『大審問官伝説』は部分的にはカトリック批判であり、部分的には普遍的な問題を扱っている。

論文審査の結果の要旨

本論文はドストエフスキーの小説『カラマーゾフの兄弟』における「罪」の問題を論じたものである。

この罪の問題を論じるために論者がとくに重視するのが、「罪の連帯性」の観念である。論文では、『カラマーゾフ

の兄弟』においてそれが多様な形で現れていることが確認される。一番下の弟アリョーシャは、ゾシマ長老の罪の連帯性についての見方を重んじ、「キリストによって、罪の共同体が愛の共同体へと変わる」と信ずる。そのすぐ上の兄イヴァンの創作劇詩『大審問官』においては「罪の連帯性」は大審問官が「民衆の罪をわが身に引き受ける」ことにある、と論者はみる。そして論者はイヴァンがこのような大審問官に自らを重ね合わせていると論じる。また民衆が犯罪者を「不幸な人間として同情」するのも、一種の「罪の連帯性」の意識から生じていると考える。父殺しの罪を背負った長兄ドミートリーは、不幸な子供のことを思い出し、その罪の意識から父親殺しの罪をかぶる。これもまた「罪の連帯性」であると論者は述べる。一方、ドミートリーが父親フョードルを殺したのは自分が原因ではないかと思い込むグルーシェンカの意識にもまた、「罪の連帯性」の意識に通じるものがあると論者は述べる。このように様々な「罪の連帯性」が共存している状態に対して論者は「ポリフォニックな構造」という言葉を当てる。

罪は裁きと対である。小説前半の修道院の場面で、イヴァンの「教会と国家に関わる」論文で論じられた教会的社会裁判をめぐってイヴァンとゾシマ長老が意見を交わす（イヴァンはその論文で国家が教会を従属すべきであり、犯罪者に対する処罰は「破門」という形を取るべきだとする）。一方、アリョーシャの実父フョードルの死と精神的な父ゾシマ長老の死をはさんで、小説後半では実際の裁判が描かれる。論者は後半は「国家の場面」が描かれているとみる。

このように論者はイヴァンの「教会・国家論」を小説全体の構造と結びつけてみせる。さらにそれをイヴァンの劇詩『大審問官』とも結びつけ、イヴァンの言動を解釈して、「イヴァンはみずからを大審問官に重ね合わせて知識人として罪を背負う」と興味深い意見を述べる。論者の意見では、「このように、社会の問題を、社会構造の把握によって考えたり、少数の知的な人々によって民衆を統治するときの問題として考えたりするのが、知識人イヴァンの方法論なのである。宗教の問題を制度のみから考え、自己の宗教感情を重視しないイヴァンの方法論は、信仰を重視する立場からは、間違ったものとされる」。論者は、このようにイヴァンの考えは宗教社会学的な視点から出発しているとみるべきである、と述べる。

上述のように「罪の連帯性」という問題設定は『カラマーゾフの兄弟』を解釈するうえで大変生産的である。しかし、問題がないわけではない。論者は、本論文で扱うのは主に宗教的な罪の問題であり、これを主要人物がどのように感じとっているかがテーマであると述べるが、実際の分析においては宗教的な罪と法的な罪の区分が曖昧になることがある。それが、宗教的な罪が法的な罪に「付随する」という言葉に端的に表れている。また「罪の連帯性」の様々な現れがどのように質的に違うのかの分析も、今後の課題であろう。このようにさらに考察すべき事柄は多々あるが、本論文は、大作『カラマーゾフの兄弟』における罪の問題という奥深い問題に真正面から取り組んだものであり、ドストエフスキー研究に新たな地平を拓くものと言える。以上審査の結果、本委員会は本論文が博士（言語文化学）の学位に相応しい業績であると判断した。